

## 共感的理解を伴う「アイヌ民族の歴史や文化」の授業の在り方

札幌市立福住小学校 代表者 鈴木 晶 夫

## I 研究の目指しているもの

アイヌ民族にみる  
「共生」という価値  
観と子供たち

## 1 研究のねらい

すべての国民一人一人がかけがえのない人格をもつ人間として尊重され、基本的な人権が保障されるという認識を培っていくことは、民主的平和的な国家・社会の形成者に必要な資質の一つである。アイヌ民族の歴史や文化等に関する学校における指導についても、この人間尊重の精神や人権問題についての正しい理解と認識がなされるようにしていくことが大切である。

アイヌ民族の生活様式には「自然と共存しながら生活する」という価値観が根底にある。この「自然を尊び自然と共に生きる」という基本理念は、豊かな現代社会に生まれ育った子供たちにとっても必要不可欠な価値観になると考える。

アイヌ民族の歴史や  
文化に対する共感的  
な理解を深める

北海道に古くから住んでいるアイヌ民族の歴史や文化等に関する学習については、社会科を中心とする各教科や総合的な学習の時間等で取り上げられている。しかし、実際には教科書や副読本等の読み取りを中心とした学習を通して、(その歴史や文化における)知識の獲得を中心とした展開になることも見られる。

アイヌ民族の歴史や文化に対する正しい知識の獲得に加え、共感的な理解を深めていくことが大切である。そのために、子供たちに価値ある体験をさせたり、有効な資料や具体物を提示したりしていくことを重視していきたい。また、ゲストティーチャーと連携することによって、授業の中に「本物の」具体的な活動や体験を取り入れることができる。ゲストティーチャー(以下GTと略す)として、札幌市ウタリ教育相談員との連携を積極的に図り、今回の研究実践に取り組んでいきたい。

具体物の提示や体験  
的な活動の場を中核  
に据えた授業を

## 2 研究の具体化

アイヌ民族の歴史や文化の理解をはぐくむことは、その子供にとっての、ものの見方や考え方を豊かにし、生きる力に資するものととらえている。そのためには何よりも共感的に理解する態度を養うことが大切である。そこで、单元の中で、体験的な活動の場を設定し、GTとの連携を効果的に活用した授業実践を構築した。

3 実践、いずれも小学校第4学年における社会科の学習内容として(=「教育課程編成の手引」に基づき)指導計画を吟味・構成した。

- ・アイヌ民族における自然観 = 自然との共生を =
- ・アイヌ民族の歴史や文化等に対して共感的、実感的な理解を深めて
- ・衣食住を追求の糸口に、子供の身近な生活経験との接点を

以上のような重点を置きながら、実践研究(=授業の在り方)を追究したい。

## II 授業実践

### 実践 1

### 「食から考えるアイヌの人々の自然との共生」

小学校 4年 総合的な学習の時間

実践者 野崎 猛（札幌市立山の手小学校）

「ゲストティーチャー」と「食」からアイヌの人たちの自然との共生に気付く教材化

#### 1 実践のねらい

4年生の社会科の学習には、「アイヌの人たちの生活と文化」という単元がある。この実践では、子供たちが価値ある体験活動を行うことにより、実感を伴いながら理解を深めていくことを目指した。そこで、今回は次の2点を大切に活動を取り入れることで教材化を図った。

1点目は、札幌市ウタリ教育相談員の松平智子さんをGTとして招いたことである。子供たちは副読本の利用や開拓記念館の見学など、社会科の学習を通してアイヌの人たちの生活や文化を学んできている。更に、アイヌの人たちの思いや考え方に深く迫るために、GTに直接話を聞くことは非常に有効な手段であると考えた。



2点目はアイヌ文化の「食」に絞り込んで教材化したことである。子供たちにとってはあまり身近ではないアイヌ文化である。そこで楽しみながら共感的に理解できる活動を取り入れたいと考えたのである。

今回子供たちが作った「シト（団子）」とは、特に儀式の際、必ずカムイ（神）に捧げる料理である。コンブシト（昆布団子）作りを行った子供たちが、その事実に出会ったとき、実感を伴ってアイヌの人たちのカムイに対する考え方を知るとともに、自然と共生する考え方に気付くことを期待した。

また、自然と共生するアイヌの人たちの考え方は、「食育」の観点からも私たちの食生活を大いに見直すべきよい機会ではないかと考えたのである。

#### 2 学習の流れ

本単元では次の3つの活動群から学習を構成した。

活動群① 学校近くの琴似発寒川の名前の由来からアイヌ語と北海道の地名との結び付きを知る活動

活動群② アイヌの人たちの食べ物を徹底的に調べる活動

活動群③ 実際にアイヌ料理「コンブシト」を作り、食べる活動

地名から北海道とアイヌの人たちのかわりに気付く活動

活動群①では、本校の総合的な学習の時間で題材として扱い、子供たちにとってなじみ深い「琴似発寒川」の名が実はアイヌ語が由来である事実をまず提示した。

また北海道内にある「別（ベツ）・内（ナイ）」というアイヌ語で川・沢を表す地名を探させることで、北海道とアイヌの人たちとの深い結び付きに気付くこととなった。

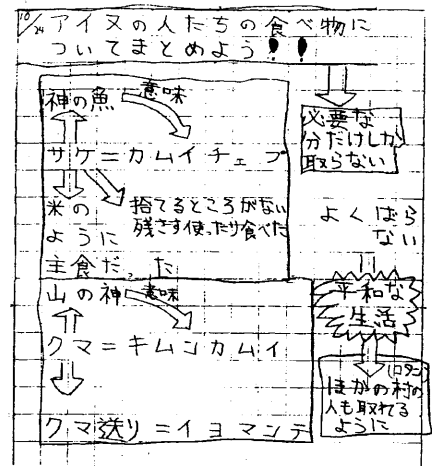
さて、そんな川は昔のアイヌの人たちにとって重要な、魚のやってくる道であり、また山に狩りに行く時の道となっていた。そこで、生活していくために欠かせない「食」について焦点化を図り、活動群②ではアイヌの人たちの食べ物を徹底的に調べる活動を取り入れた。

追求の財産をつくる  
調べ活動の設定

子供たちは多くの食べ物の中でも特に鮭と熊に次の2つの点から注目した。1つ目に鮭は「カムイチェブ」、熊は「キムカムイ」といって「カムイ(神)」にかかわるということ。2つ目にどちらも捨てることなくすべて食べ、衣服などに利用するというのである。また、必要な分しか食料はとらないということに対しても、子供たちは自分たちなりの考えを深めていった。

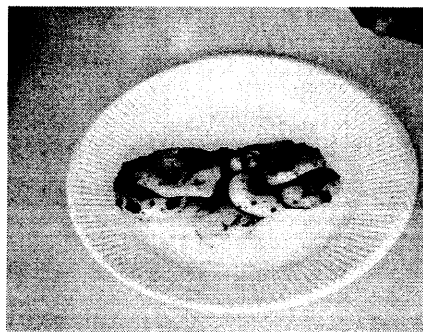
体験活動に浸り、子供が五感を働かせ、夢中になれる活動

活動群③ではGTを招き、実際にアイヌ料理「コンブシト」を作り、食べる活動を行った。



【子供のノートから】

ゲストティーチャーの言葉から更なる見方・考え方の高まりへ



カムイに捧げなければ食べられない食べ物である事実を提示し、前時までの鮭や熊肉のことを想起しながら「どうしてアイヌの人たちの食べ物はカムイと関係あるの?」という学習問題について考えていった。

子供たちは既習を生かし、次の2つの視点からアイヌの人たちの自然との共生という考え方に迫っていった。

1つは「食べ物を神と考えていた」「食べ物は神から与えられたものと考えていた」という視点。もう1つは「自然を守るため」「次の命を守るため」という視点である。

松平さんからは「アイヌには自然という言葉はありません。なぜなら自分も自然の一部だという考えをもっているからです。みなさんの考えてくれたことはまさにその通りです」と評価をいただいた。

松平さんの言葉を直接聞くことにより、自然に対するアイヌの人たちの思いや考え方にさらに迫ることができたとともに、自分たちも自然をより大切にしていかなければという見方や考え方を高めることができた。

### 3 成果と課題

今回の実践では「食」の体験をもとにアイヌの人たちの自然への考え方に気付いていくことができたと言える。さらにGTとの活動を通して、アイヌの人たちの自然観を改めて知ることにつながったことも大きな成果であった。

また、これまでの実践ではアイヌの人たちの食べ物を作る際には、鮭を扱うことが多かったが、今回扱ったコンブシトはより一般化しやすいものであるとする。

一方、今回は、「食」に限定した単元構成だったが、限られた時数内で多面的にアイヌ文化に触れる教材化の必要性も感じた。

多面的にアイヌ文化に触れる

#### コンブシト レシピ

この二つは同時進行で!

- ①コンブをレンジで2~3分チンしましょう!  
※皿で広げて並べてコンブを並べましょう
- ②ミキサーでコンブをくだきます
- ③こんぶが粉になったらOKです

- ①なべでお湯をわかす
- ②白玉粉と上しん粉を1袋ずつまぜ、ぬるま湯で耳たぶ位のかたさにまぜる。
- ③だんごの形を作りゆでる  
⇒ゆであがったらそのままざるですくう。  
(ゆで汁はそのあと使うのでとっておく)

- ①こんぶの粉をなべに入れる。
- ②こんぶの粉にゆで汁を適量とろっとするくらい入れる。
- ③それを火にかけふつとうさせる。
- ④そこへさとうを大きじ1弱、しょうゆ少々、べに花油少々
- ⑤ボールに入れだんごとからめる。
- ⑥完成!!!

#### 【材料】

- 4人~7人分
- ・上しん粉1袋
  - ・白玉粉1袋
  - ・こんぶ適量(30cm位の昆布7本程度)
  - ・さとう大きじ1杯
  - ・しょうゆ少々
  - ・べに花油少々

1 実践のねらい

実践の前に札幌市ウタリ教育相談員の松平智子さん（GT）から教えていただき、とても心に残ったことがある。アイヌの人たちが山を歩くときは「踏むな踏むな、折るな折るな。」と言いながら歩いたそうである。自分たちが歩きやすくなるようにけもの道さえつけることなく、同じ道を歩かなかったのである。この話からアイヌの人たちが自然をいかに大切にしようとしているかがわかる。子供たちが知識に偏らず、アイヌの人たちの思いを学んでいくために次のことに重点をおき、教材化した。

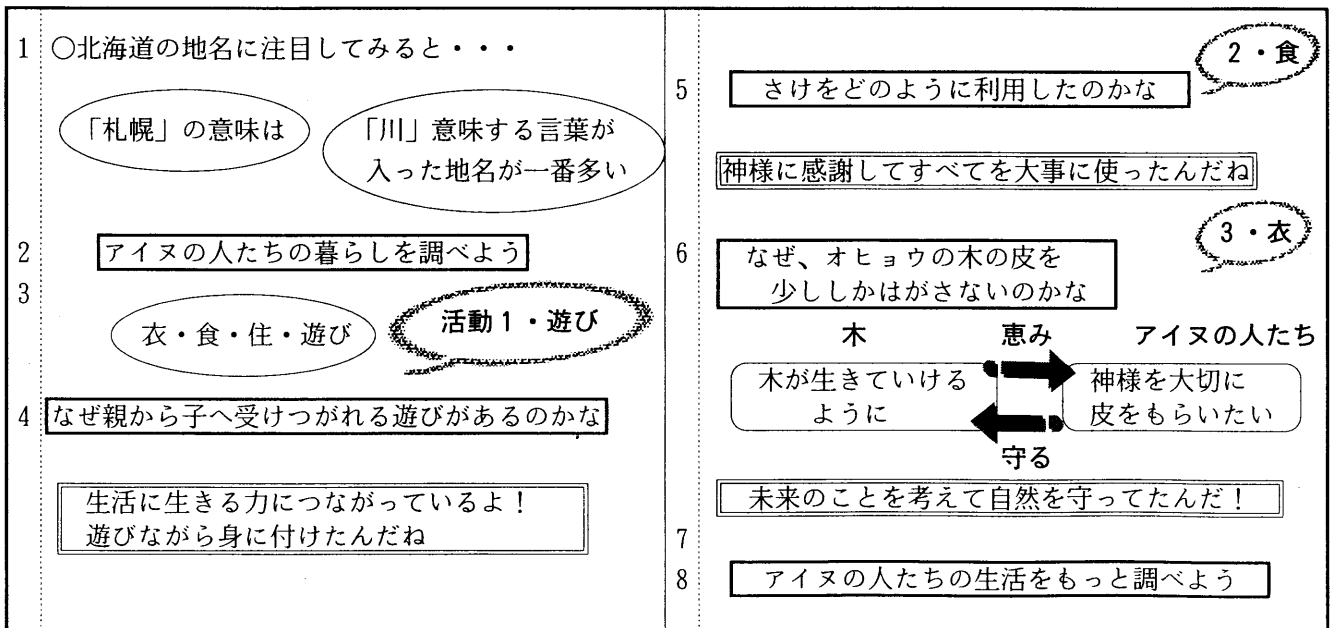
○地名から「川」の役割へ

単元の初めに、アイヌ語が由来である北海道の地名の中で最も多い意味は「川」であることに気付く活動から、「川はアイヌの人たちにとってどんな存在なのか」という単元をつらぬく課題をもつ。まずは調べ活動により、川とそれに通ずる海や山が生活に必要なものを得る場であったことを知る。そして、川で捕れる主食の鮭、山にあるオヒョウの木にかかわる営みを取り上げ、アイヌの人たちの自然への思いをより深める学習構成にした。単元を通して「川」にかかわる学びを積み重ねていくことで、その重要性に気付くことができると考えた。



単元をつらぬく課題で、追求の核をもたせる学習構成

2 学習の流れ



イメージの具体化から  
考えの広がりへ

実感をともなった問題意識を生み出す  
疑似体験

学びのつながりから  
アイヌの人たちの心情に迫る

本物との出会いがより  
考えを深める

アイヌの人たちの生活の様子について、子供たちが課題をもって学習を進めていけるように、アイヌの人たちの衣食住について予想を絵で表す活動を取り入れた。

予想を交流する中で、「食べ物をとるための道具があったのではないか」などと、考えが広がりを見せた。確かめてわかったことを再び絵でまとめさせたことによって資料の写真を注意深く見たり、文章の意味を考えたりする様子が見られ、資料を活用する力を付ける活動にもなった。

「衣」のアツシを取り上げた活動では、アツシ・実際のオヒョウと同じ太さの木の模型を用意した。まず、ビデオでオヒョウの皮のはがし方を視聴し、その後、はがす量について予想をもたせるため、子供たちに木の模型の皮をはがさせた。実際にアイヌの人たちのはがす量が少ないことを知り、アツシ一着にととも足りないことから「なぜ、アイヌの人たちは少ししか木の皮をはがさないのだろうか」という課題をもった。

子供たちからは「木が死んでしまわないように」「アイヌの人たちは身のまわりの自然がすべて神だと思っていたから大切にしている」などの考えが出た。また、「同じ神として考えられていた鮭はすべてを大切に使ったのに、なぜオヒョウの皮は全部使わないのか」という既習を生かした疑問も出され、オヒョウの命を大切にしようとする気持ちがより深まった。“オヒョウを大切にすることで、また木の皮を得ることができる。自然を守ることは自分たちの未来の生活を守ることだ”ということに気付くことができた。



最後にGTから、アイヌの人たちのアツシ作りへの思いと自然との暮らし方についてお話をいただいた。鮭を捕る時も決められた範囲内で必要な分だけ捕っていたこと、「自然」を意味する言葉はなく、自分も自然の一部と考えていたことを教えていただき、アイヌの人たちが自然と共存しようとしていたことがわかった。アツシを触った時、子供たちから「フカフカしている」「やわらかいね」という感想が出た。アイヌの人たちの自然を大切にする温かい思いが伝わったようである。

### 3 成果と課題

アイヌの人たちの衣食住を調べる活動にとどまらず、そこで出てきた疑問や考えにつながる道具などの写真を提示することで、子供たちは意欲的に学びを進めることができた。

アツシの授業では、オヒョウの木と同じ太さの木の模型を用意し、アイヌの人たちが実際にはがす量の少なさを実感することはできた。しかし、はがし方の工夫をすることで、自分の予想とのズレから問題意識をもたせることができたと考えられる。

GTにお話をいただいたことで、それまでの「守る」「神様だから」という考え方から、「アイヌ（人間）も自然の一部である」という、より深い考え方にふれることができたのが大きな成果であった。

体験的な活動によってアイヌ文化の素晴らしさを味わう教材化

### 1 実践のねらい

4年生の社会科「アイヌの人たちの生活と文化」を学習するにあたってアイヌに関する事前アンケートを行った。多くの子供がアイヌという言葉を目にしたことがあると答えたが、アイヌ民族の歴史や文化について具体的に知っている子供は4、5名に過ぎなかった。北海道に住む人間としてアイヌ文化の理解を深めることは、歴史的な観点のみならず、自然との共生を志向する環境的な観点や伝統の継承という観点からも極めて重要なことである。

そこで今回の学習では、アイヌの文化を共感的に理解し、自分の見方や考え方を豊かにすることをねらい、以下のことを柱に教材化を図った。

#### (1) 体験的な活動に浸り、アイヌ文化を味わう場の設定

楽しみながら文化を味わう場としてアイヌ文様作りを取り入れた。様々な意匠を組み合わせたアイヌ文様はアイヌを象徴する文化の一つである。自然の造形に着想を得た文様作りに取り組むことで、デザインの面白さや複雑さを感じるとともに、自分の作品を作り上げる達成感を得ることができると考えた。

#### (2) GTの積極的な活用

アイヌ文様作りでは、札幌市ウタリ教育相談員の松平智子さんをGTとして招き、作り方を教えていただいた。事前に文様作りの講座に参加したため、担任が教えることも可能であったが、GTに直接教えていただくことでこの体験の価値が増すと考えたのである。また、文様に対する子供の疑問やその意味について直接教えていただけることは、アイヌの人たちのものの見方や考え方を学ぶ上でも極めて有効な場になると考えた。

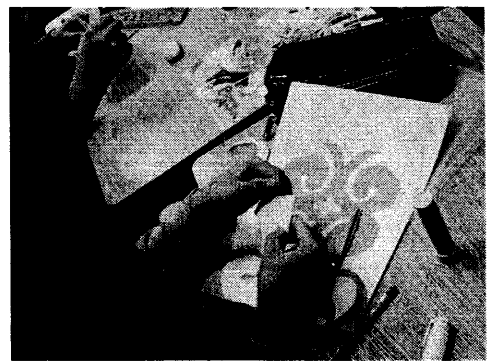
### 2 学習の流れ

#### アイヌ文化との出会い

- ①北海道の地名を調べる活動(1、2時間目)
- ・『別(ベツ)』がつく地名探し(ベツ=川)
- 40近くもあるよ。川が多いから?  
川のそばに住んでいたの?

#### 具体例から追求

- ②アツシのひみつを探る活動(3、4時間目)
- ・「作り方のひみつ」
- どうして木の皮を全部はがさないのかな?
- ・「文様のひみつ」(本時)
- どうして、文様を付けるのかな?  
実際に文様を作ってみよう。



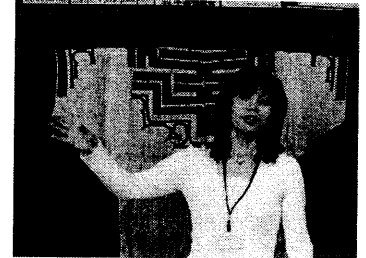
#### 発 展

- ③アイヌの人の生活を調べる活動(5、6時間目)
- 「新聞づくり」 ・ チセ ・ 食べ物 ・ 遊び ・ 衣服 ・ 地名

今回の学習活動の核は、文様作りの活動である。それまでに北海道の地名について「ベツ（川）」のつく地名が多いことから、子供たちは「川のそばに住んでいたのでは?」「川で鮭をとっていたのでは?」「熊や鹿もとっていたのでは?」というようにアイヌの人の生活の様子を思い浮かべるとともに、アイヌ語に由来する地名やアイヌ語に興味を示し自ら調べてくる子供が増え、アイヌ文化との距離が縮まっていった。また、次のアツシに焦点化した学習では、そこに描かれた文様に目を付けるとともに、材料であるオヒョウの皮を少ししかはがさないことから、自然を大切にしたいアイヌの人たちの願いや知恵に気付いていった。

文様の意味を予想し  
アイヌの人の願いや  
知恵を知る場

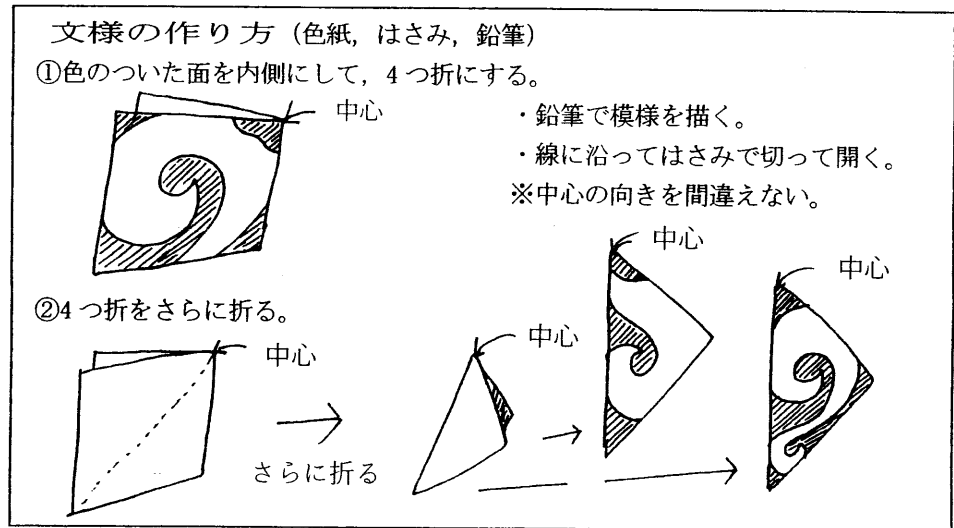
学習公開した本時場面では、まず、アツシに文様をつける理由について子供たちに尋ねてみた。「何もつけないとさびしいから」「強そうに見えるから」「かっこいいから」など外見にかかわる考えと「村や家の印ではないか」「儀式に関係あるのではないか」「プレゼントするのでつけたのではないか」など、何らかの意味を求める考えが出された。



GTの松平さんは、それぞれの考えについて、一つ一つ認めながら「体の中に魔が入ってこない 意味もあるんですよ。」と新たな意味についても教えてくださった。続く文様作りの活動では、簡単なパターンから徐々に難しいパターンに挑戦し、黙々と文様作りに取り組む姿から活動に浸っていることが実感できた。当初は時間の関係上、2つのパターンの予定であったが、「もっと作りたい。」という声もあり、3つ目のパターンを紹介し、若干時間を延長して活動を続けた。

文様作りに浸り、アイヌ文化の素晴らしさを体感する場

このようにして、子供たちは文様の意味についての理解を深め、文様作りの楽しさをじっくりと味わうことができた。また、家に帰ってからも家族の前で作ったり、自分の作品を紹介したりと、この活動が子供にとって、「人にも知らせたくなる魅力的なもの」であることが実感できたのは大きな成果である。



### 3 成果と課題

今回の実践では、文様作りが子供たちにとってじっくり楽しみながら取り組むことができる活動であることが実感できた。また、色紙とはさみという簡単な道具で実践できる手軽さも魅力である。アイヌの人たちが連綿と受け継いできた素晴らしい伝統を身をもって感じることはできたのではないかと考えている。

しかし、造形的な喜びに対して、自然との共生という面には直接的には結び付きづらい弱さも感じた。この点については、他の教材との組み合わせによって補完する必要も感じた。

### III 研究の成果と課題

体験的な活動やGTの活用で、アイヌの人たちの自然観に共感的な理解を

#### 1 研究の成果

今回の研究では、体験的な活動を重視し、GTを活用する学習によって、子供たちの興味・関心を高め、アイヌの人たちの自然観に共感的に理解することができた。

まず、「食から考えるアイヌの人々の自然との共生」の学習では、コンブシト作りを行った。そうすることによって、食べ物を神と考え、次の命へつないでいこうとするアイヌの人たちの「自然との共生」という考え方に、共感的に迫っていくことができた。また、自然と共生するアイヌの人たちの考え方への尊敬の念を生むこともできた。

「アツシ作りからアイヌの人たちの暮らし方へ」の学習でも、オヒョウの皮をはぐ擬似体験を行った。そうすることで、「なぜ、少ししか木の皮をはがさないのか」という問題意識を子供たちにもたせることができた。そして課題を追求していく中で、アイヌの人たちの自然を大切にしたいという思いに迫っていくことができた。

「文様作りを通してアイヌ文化の素晴らしさを味わう」の学習では、アイヌ文様を折り紙で切り抜いて作る学習を行った。子供たちは、文様の美しさやアイヌの人たちが文様を大切に考えていたことをとらえていった。

これらの体験的な活動の成果は、GTの活用によるところが大きい。GTが説明をしながら活動を進め、アイヌの人たちの考え方を子供たちに語る。そうすることで、より実感の伴った具体的な活動や体験を取り入れることができた。また、考えたことについての検証ができ、教師が話す以上に子供の納得を生むことができた。これらの取組を通して、アイヌの人たちの自然に対する思いや考え方にさらに迫り、自分たちも自然をより一層大切にしていかななくてはならないという共感的理解を深めることができた。アイヌ文化と子供との距離が縮まったといえる。

このような、体験的な活動やGTを活用する価値が、今回の研究を通して明らかになった。

#### 2 今後の課題

今回は、体験的な活動を取り入れることで共感的な理解を図ることができたが、授業構成を考える際には、その体験から何を学ばせるかが大切になってくる。学習の核を、今回のようにアイヌの人たちの自然観だけではなく、伝統・文化という側面を切り込み口にしていくことも考えられる。

本実践では3本とも札幌市ウタリ教育相談員の松平さんをGTに招いて、共感的な理解を図る学習に取り組んだ。今後も、より効果的なGTの活用に対する実践研究を深め、GTの活用さらなる広がりをもたせる必要があると考えている。

アイヌ民族教育のより一層の充実・発展のために

#### 【参考文献・視聴覚資料・施設等】

- ・「アイヌ暮らしの民具」 萱野 茂 クレオ
- ・「アイヌ文化の基礎知識」 アイヌ民族博物館 監修 草風館
- ・「アイヌ歳時記」 萱野 茂 平凡社新書
- ・「アイヌ生活文化再現マニュアル『織る』」(VTR・資料) 財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構(中央区北1条西7丁目プレスト1・7 Ⅱ:271-4171)
- ・札幌市アイヌ文化交流センター「サッポロピリカコタン」(南区小金湯27 Ⅱ:596-5961)
- ・札幌市ウタリ教育相談員 松平智子(南区小金湯27 Ⅱ:596-1610)